

# 太白

TAIHAKU

## 社の中の放送局から皆さまと共に～東日本大震災から10年

東北放送株式会社 総務部長 吉田 信也

東日本大震災からまもなく10年を迎えるにあたり、被害に遭われた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

あの時私は、太白区八木山にある築50年近い社屋にいました。何度も襲う余震の中、スタッフの安全確認をする者、テレビカメラで状況を撮影する者、そしてラジオやテレビで繰り返し安全確保を呼びかける者。災害発生時、何より必要なものは「正確な情報」です。被害の状況や安全を確保するための情報を、いち早く、同時に、大勢の人たちに届けることができるのが、テレビやラジオという放送メディアの大きな強みです。しかしながら、放送には電波が必要で、電波が止まってしまうとテレビやラジオが手元にあっても、情報を見たり聞いたりすることができません。東日本大震災では、その電波を届けるために必要な送電がストップしました。電波を届けるための施設（中継局）には自家発電装置が備えられていますが、発電装置を動かすための燃料が途中で空になってしまったり、沿岸部では中継局そのものが流される被害に遭いました。太白区八木山のtbc本社も送電が数日間ストップしたため、その間は自家発電装置に燃料を補給しながら放送を継続しました。

その経験を教訓に、BCP対策を強化した新社屋建設計画が2013年にスタートしました。放送局におけるBCPには電気の確保が何より重要です。災害発生時、一般企業の場合は生産能力の低下を見越して重要業務に絞り込む対策を講じることが多いと思いますが、放送局の場合は逆に生産能力を普段より引き上げる必要すらあります。そのため、新社屋建設計画では自家発電装置を動かすための燃料タンクを増強し、72～100時間超の電力供給が可能にな

りました。また、本線と予備線の2系統による電源確保や、雨水ろ過装置による断水対策（トイレ洗浄用）など、災害時でも放送業務が継続できる社屋とし、2020年1月に竣工、6月から運用を開始しています。

東日本大震災以降も、様々な自然災害により各地で甚大な被害が発生しています。そういった災害を教訓として、私たちの放送業界では様々な取り組みが行われています。例えば、テレビやラジオを視聴できない環境でも、スマートフォン等を利用して映像や音声を配信したりしています。なかでも、FMラジオ放送とインターネット配信をスマートフォンの「radiko アプリ」上で簡単に切り替えることができる、ハイブリッドラジオ『ラジスマ』が2019年に誕生。災害時におけるラジオの有用性と、放送&通信という複合的な手段による情報伝達が可能になりました。

東北放送は2020年1月、新社屋完成に合わせて、新しい「コーポレート・アイデンティティ」を制定しました。新スローガン「はやく、ただしく、おもしろく。」には、何よりも早く伝える、何よりも正しく報道する、何よりも面白い番組を作るという、放送局の核心とも言える価値や想いを込めました。ロゴも小文字のtbcとし、「t」の中にテレビのチャンネル番号「1」を組み込んで、宮城県で1番早く開局した民間放送局であることと、そのチャレンジ精神を表現しています。そして10月には、新キャラクター「モリーノ」が誕生しました。

社の中の放送局から、これからも宮城県の皆さまと共に歩んで参ります。

